



VENUS AND ADONIS,
THE RAPE OF
LUCRECE AND SONNETS

BY

WILLIAM SHAKESPEARE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. OKAKURA

TOKYO
KENKYUSHA

1928



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



昭和三年五月十七日 印刷

昭和三年五月二十日 發行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番

非 賣 品

序

書齋の中の急がしい朝夕に心身の疲勞が甚だしく感ぜられるをりをり、私はよく飄然と家を後にして、一日の氣儘な散策を、以前はやゝ遠い郊外、または隣接の地方の古社名刹の所在地にぶらりと唯一人で出かけたものだ。さう云ふ時の私のポケットの一つには、習慣はおそろしいもの、何か薄い手頃な、おほくは横文字で綴られた書物が、道連れとして、大概の場合、忍はせてないで、何さなく心淋しく覺えられてならなかつた。殆どいつも、それだけの重荷を背負つて遠き路を行くたのが落ちであつたのから考へるに、*“a favourite English poet in one pocket; and a small 12mo volume, containing about nine plays of Euripides, in the other”* と云ふ De Quincey の『告白』のあの學校抜け出の朝ぼらけの美しい叙事などから、いつさなく影響を受けての虚榮心も大分手傳つたものと、今からは考へられる。ギリシヤ語を味讀する力の無い私は、Lamb, Hazlitt, Stevenson, 近くは Belloc, Lucas など大抵は連れて歩いたが、たまには Dent 版の“Temple”叢書を、専ら手ごろなるが故に懷へ忍はせることもあつた。The “Temple” Shakespeare 中の *Venus and Adonis* や *The Rape of Lucrece* も、斯うした關係から斯うした同伴を私の爲に強ひられたことゝ私は記憶する。

The Sonnets に至つては、道端の芝生の上の話相手を一再ならず命ぜられて大に迷惑を覺えたことでもあつたらう。しかし、その都度、念入りの難解さをもしみじみと、その書本は私に感ぜさせずにはおかなかつた。處が、不思議なことにその書のむづかしさは、道しるべの葉が不足の爲ではなく、案内者の數が多すぎる爲、却つて

途方にくれると云ふ次第。その様を喩へて言はうなら、江の島の辨財天へ參詣をする者が島の入口から岩屋の御堂までの細路を挟む左右軒並の掛茶屋や宿屋から、小娘やら、新造やら、赤前垂にお白粉もの凄く、五色の聲を振りしぼつて、「お休みなすつていらつしやい、奥の院の御案内はこちらです。お草履に穿きかへていらつしやいまし、お土産の繪はがきも御座います」と叫(ゑ)き立て、耳も聳せんばかりであるのに、大に似て、何やら淺ましい感も無いではない。しかるべき眞面目の學者を客引に見立てるのは甚だ不遜なふるまひではあるが、Drake, Boswell, Bright, Boaden の面々を手始めに Dyce, Coleridge, Anna Jameson, Charles Armitage Brown, Hallam, Chalmers, Joseph Hunter, Charles Knight, Charles Bathurst, Collier, Cartwright, Barnstorff, Howard Staunton, Delius, Heraud, Taine, Thomas Kenny, Palgrave, Hitchcock, Richard Grant White, Gerald Massey, Philarète Chasles, &c., &c., &c. こうした最も良い意味での tout の數々の名を、息も切れ切れに呼びあけて見ても、やつと 1879 年頃までの Shakespeare scholars のそれのみに過ぎぬ。江の島路ならほんの登山の一帳場、二十世紀に入つてからも Courthope, Garnett を眞先に聲を囁らして、「お泊りならは宿らんせ」と湯加減の好さを喚ぶ者、主人、番頭、綺羅星を列をなしてゐる。そのものものしさに、氣の弱い私は、唯うろうろ、一層のこそ眼をつぶり耳を蔽うて、たゞ眞一文字に辨天の洞窟を指して進むかそれとも參詣を次の機會に譲つて元の路を逆に辿るか、二つに一つを選ぶよりほかに身の置き處を無いと見るに至る。

本書の註、特に *Sonnets* のそれに筆を執るに當つて、この感がここに深かつたことを巻頭に記して、この叢書の讀者に斯うした打つけの愚痴をこぼすことを許していただきたいのである。

昭和三年二月二十二日

岡 倉 由 三 郎

INTRODUCTION

本叢書の中に組み入れられた Shakespeare の劇は、既刊の三輯に於て既に七種を算し、本輯に於て更に四種が加へられることになつてゐる。それら既に公にせられた作物の註釋の際にも作者の評傳は種々の角度から試みられ、またこの輯に入つても同様の考査が行はれるのであるから、蛇足を省くため、茲には本書に合刊されてゐる三種の詩に就いて簡短な解題を附するに止めておく。かく簡短を主とすることは特に *Sonnets* の解釋に於て驚くばかりに多數の頁を費す必要に迫られたためでもある。

I. "VENUS AND ADONIS"

この詩が初めて出版されて書籍出版業組合 (Stationers' Hall) の登録済になつたのは、1593 年四月十八日のことで、版元は Richard Field, 屋號を "White Greyhound" と云ふ、ロンドンに St. Paul's Churchyard 所在の店で販賣された四折 (Quarto) 型の本で價は一部 vid (=sixpence) であつた。Shakespeare の誕生は 1564 年の四月(二十二、三日の頃か)であつたから、この作は彼の満二十九歳の若人の頃のもので、その手に成つた物は何一つまた出版されてゐず、これが文人生活に於ける彼の初めての出船であつた。その點から觀て、この詩の卷頭に掲げてある Southampton 伯に對する奉獻の辭の中の "the first heir of my invention" は、ある批評家の言ふが如く、「また故郷の Stratford-on-Avon に居た一層若い頃に作つた最初の文筆の産物と云ふ意」ではなく、劇に對して抒情詩または叙事詩を言つたものであらうと言ふ。一説に 1593 年は大にベストの流

行を見た歳で、それが爲にロンドンの劇場は興行を禁止せられたのであるが、舞臺の上の活動が一時中止となつたので俳優としての Shakespeare も多少の隙が出来、それがこの作の執筆を促したのではないかと云ふ。但し、その際の俳優の團體はちつとしてロンドンに徒食してゐたのでは無く、それぞれ旅興行に出たのであるが、さうした巡業に Shakespeare も加はつてゐたかどうかは、記録が不十分で孰れとも斷言は出来ぬさうである。

この作の版元は前記の Richard Field であつたが、この人は、Stratford-on-Avon の製革業者 Henry Field の子で 1579 年にロンドンに出て印刷業者の徒弟となり八年後、一本立の營業をするに至つたのであるが、開業の翌年すでに Ovid の *Metamorphoses* を美しい装幀で出してゐる。その父 Henry の製品を、Shakespeare の父は郷里で鑑定評價の事に當り、1593 年にはその子の Richard Field が Shakespeare の初めての詩を出版してゐる處を見るに、この兩家の間には深い縁故が同郷人として結はれてゐたものと考へられる。物語の筋を多少は變更して、Adonis を女色に全く無頓着の無垢な青年に仕立てたあたりに新しい趣向が窺れないではないが、着想は *Metamorphoses* 第十の第十話に従つて Venus の戀慕を叙したのも Richard の事業の一つとの交渉と考へ得られるではなからうか。

この詩は世人の歡迎を受けたと見えて、詩人の病歿の年即ち 1616 年(四月二十三日)に至るまでの二十三年間に六版重ね、その後の六十年に更に七版を重ねてゐる。

表題の下に掲げた Ovid の *Amores* からの引用の對句は、1597 年出版の *Ovid's Elegies* の中に見える Marlowe の譯のほかに Ben Jonson の譯もある。それは、

“Kneel hinds to trash: me let bright Phoebus swell
With cups full-flowing from the Muses' well.”

と云ふのである。但し、“Kneel hinds to trash”とは「土百姓どもは愚にもつかぬ文字を金玉と崇め尊ぶがよい」と云ふほどの意。

偕 Shakespeare が *Venus and Adonis* を作るに當つて詩形 (ab ab cc の押韻) もまた不用の語句も Thomas Lodge (1558?-1625) の *Glaucus and Scilla* (1589) に負ふ所が多いと言はれてゐる。その他に關係の作品を尋ね求める者は Marlowe の *Hero and Leander* を擧げて類似の點が往々あることを指摘する。その人々は *As You Like It* (III. v. 83) に Marlowe のこの作 (Sestiad I) から引いた有名な “Who ever loved that loved not at first sight” のあるのを貴重な一つの證例とするが、*Hero and Leander* は Marlowe が 1593 年 (六月一日) に不慮の死を招いた時、未定の草稿であつて、後 1598 年に遺稿としてその詩が公にされてから *As You Like It* に引用せられたものとは十分に考へられるが、Shakespeare が *Venus and Adonis* を筆にする時 Marlowe のその未刊の作品に影響せられてゐたことは容易に斷言は出來ぬのである。

Venus and Adonis が Ovid の *Metamorphoses* を源としてゐることは既に述べたが、「僅かはかりのラテン語と更に一層わづかなギリシヤ語」(“Small Latin and less Greek”) ほか知らなんだと Ben Jonson は評したその Shakespeare が之を原文で讀み得たらうか、それとも Arthur Golding (1553?-1605?) の譯本で讀んだのか素より判然とせぬ。これは多分、Jonson は自らの可なり深いラテンの學力から推してあつた評語を加へたので Shakespeare たゞで一通りはラテンに通じてゐたのもあらう。それは未定としても後 (1600 年) に出版された名詩選集 *England's Helicon* に掲載の Henry Constable (1562-1613) 作の *Shepherd's Song of Venus and Adonis* を、稿本のまゝで一讀し、それから多少影響される所があつたことも想像出來ないことも無い。

この、Shakespeare の謂はゆる “the first heir of my invention”

の奉獻を受けた Henry Wriothesly 伯に就いては、*Concise Dictionary of National Biography* から略傳を引用しておいた。父の第二代 Southampton 伯は、1569 年に企てられた Mary Queen of Scots と Norfolk 公爵との結婚の策動にも與り、且つ舊教徒と結託したの故を以て國事犯人として Tower of London に禁錮の身となつた人。その後嗣の三代目の伯は Cambridge の St. John's College に學び 1589 年に M.A. の學位を得て後 Gray's Inn に入つて法學を修めた。この人の保護の下に立つた文人は Shakespeare の他にも數人あつた。Italian-English の大辭典を 1598 年に編輯し、また 1603 年には Montaigne の *Essais* を英譯したりして大に文學に貢獻のあつた、かの John Florio (1553?-1625) なぎもその中の一人である。父に似た政治的徑路を辿つてこの人も亦 Tower of London に幽閉の身となり一旦は死刑にも處せられる事になつてゐたが幸に赦免を受け再び天日を仰いで家系を繼ぐに至つた。1605 年には Weymouth の Virginia 遠征隊 (1605 年) に大に後援の力を添へ、1609 年には Virginia Company の重役の一員となり 1620 年以後四年間は同會社の會計官を勤めた。また 1609 年には東印度商會にも關係するに至り、また東印度西北航路會社やバムーダス島商會 (Bermudas Island Co.) の創立者でもあつた。Shakespeare より九歳の年下で、詩人より八年生き延びて 1624 年にオランダ地方に遠征中に熱病の爲多事の一生を終へたのであつた。

II. "THE RAPE OF LUCRECE"

この詩は *Venus and Adonis* の出た翌年即ち 1594 年に出版されて、Stationers' Register には同年五月九日の條に Master Harrison, Senior の名で版元登録が載つてゐる。この版元は同じ年の六月二十五日には *Venus and Adonis* の版權をも Richard Field から譲り受け (そして滿二年の後それを William Leake にまた譲り渡し) た

出版者である。この出版物もやはり價は vid で、形も同じ Quarto 型で横は鯨の一寸八分、豎は同じく二寸二分。その小さな本の扉の意匠は上部に中央の人の顔を取まく花鳥唐草模様の四分幅の横カット。その下に大きく

LVCRECE.

さ入れ、その下の中央部に堅小判形の飾付きの圓の中に上部の雲の中から出した右の片手が環で二股の大碇を釣り下けてゐる圖、そしてその左の側から右側へアーチ形に・ANCHORA・SPEI・(「望みの碇」)と云ふ motto が雲の畫を挟んで出てゐる。その圖の下部には、次の如く刷つてある。

LONDON

Printed by Richard Field, for Iohn Harrison; and are
to be sold at the signe of the white Greyhound
in Paules Church-yard. 1594.

但し、上述の碇の圖は *Venus and Adonis* の扉にも殆ど同形で出てゐる。

これで、この詩の題目がたゞ“Lucrece”とのみあることが知れるが、Stationers' Register には“a booke intituled the Ravysheiment of Lucrece”とある。之を *The Rape of Lucrece* と呼ぶのは通稱に過ぎなかつたことが知れる。

Lucrece に對する世人の受けは、*Venus and Adonis* の如く盛んでは無く、十六、七の二世紀に亘つて 1594 の初版以外には、1598, 1600, 1607, 1616, 1621, 1632, 1655 などの年に版を重ねたに過ぎぬ。また *Lucrece* を *The Rape of Lucrece* と本書の扉に印刷し始めたのも 1616 年版以後のことで、それまでは Shakespeare と云ふ著者の名も示されはしなかつたのである。その 1616 年版の扉の文句は次の通りである。

THE | RAPE | OF | *LUCRECE*. | By | Mr. *William Shakespeare*. | Newly Reuised. | LONDON: | Printed by *T.S.* for *Roger Jackson*, and are | to be solde at his shop neere the Conduit | in Fleet-street. 1616.

この版は“Newly Revised”とあつたり、詩人の名が初めて出たりしてゐるのだから、それまでのものより、一層良いものか一寸思はれるが實は、“as the readings are generally inferior to those of the earlier editions, there is no reason for attaching any importance to an assertion which was merely intended to allure purchasers”と Cambridge edition は警告を與へてゐる。

この詩の採り用ひた詩形に就いて George Wyndham は斯う述べてゐる、“It is written in the seven-lined stanza borrowed by Chaucer from Guillaume de Machault, a French poet, whose talent, according to M. Sandras, (in his *Etude sur G. Chaucer*, 1859) was ‘essentielle-ment lyrique’ (=essentially lyrical). The measure, indeed, is capable of the most heart-searching lyrical effects. Chaucer chose it, first for his *Complaint unto Pite* and, more notably, for his *Troilus and Criseyde*; in 1589 Puttenham (?) had noted that ‘his meetre Heroicall is very grave and stately,’ and, was ‘most usuall with our auncient makers (=poets)’; Daniel had used it for his *Rosamund* published four years before *Lucrece*, Spenser for his *Hymnes*, published the year after.” (*Poems of Shak.*, Intro. xciii.)

Shakespeare がこの題目に着眼したのは Ovid の *Fasti* 「歌暦(うたごゑ)」(Book ii, ll. 721 *et seq.*) に據つたものとすると、同じローマの詩人の手に成つた *Metamorphoses* から *Venus and Adonis* が生れたことが思ひ合されて興味が深い。但し、この烈婦の悲壯な物語は Livy の「ローマ史譚」(I. 57) にも簡短な記事があり、その記事から取材した *The Rape of Lucrece* と云ふ一齣が William Painter (1540?-

1594) の *The Palace of Pleasure* (1566 年版) にも扱つてある。Shakespeare はこれらの書からもヒントを得ないとは云へぬ、さは Dr. Furnivall の説。Thomas Warton (1728-90) の大規模な *History of English Poetry* (1774-81) は、*A ballet of the greivous complaynt of Lucrece* (1568) 及び *A ballet of the death of Lucreessia* (1569) を掲げてゐる。但し、こゝに云ふ “ballet” とは外國の風物を劇的に仕組んだ一種の「所作(き)物」のこゝ。これらは Shakespeare に知れてゐなかつたか誰が言へよう。また Chaucer も、Ovid から取材した Lucrece の物語を、その *Legend of Good Women* の第五話に出してゐることを忘れてはならぬ。この他に、North の *Plutarch* 中の言及また Sidney の *Apologie for Poetrie* 中の Lucretia の畫像を主題とした詩論も、Shakespeare には知られてゐたに相違ない。

斯う云ふと Shakespeare はたゞ既に素描の出来てゐた畫布に色彩を加へて之を完成したゞけのやうに考へられる虞が無いでもない。その心配から Wyndham は “But speculation on the literary origins of a poem is idle when the poem is in itself far worthier attention than all the materials out of which it has been contrived—the more so when of these the literary origins are the most remote and the least important” と述べ、Shakespeare と Chaucer との同じ Lucretia の扱ひ方に言及して、“Shakespeare, indeed, owes more to the manner of Chaucer’s *Troilus* than to the matter of his *Lucretia*, or of its original in Ovid. For in treating that story the two poets omit and retain different portions: Chaucer, on the whole, copying more closely paints on a canvas of about the same size, whereas Shakespeare expands a passage of 132 lines into a poem of 1855.” 云々と *The Poems of Shakespeare* の “Introduction” (p. xciv) で言つてゐる。

このついでに一言述べておくべき事は、この詩とその前年の作の *Venus and Adonis* との交渉である。この二作は、その様式から

云つて構造も装飾も類似の點が多いのは、Shakespeare 時代の物語の作風を受けたものとして當然のこゝである。*Lucrece* の調子は *Venus and Adonis* のそれとは大に趣を異にしてゐる。後者の奉獻の辭の中に謂はゆる “some graver labour” が即ち前者となつて實現された爲か、とにかく *Lucrece* は *V. & A.* より何さなく重つ苦しい。一層上品ではあるが暗い氣分で、興感が十分に湧かぬ。これは扱はれてゐる主題そのものが、一は廣野の日光を浴びての事相、他は閨房の灯ほの暗い中での出来事である爲にも大に據るのに相違ない。この二作の關係を Burns の作品に就いて言つて見れば *V. & A.* は *The Jolly Beggars* (K.E.C. 本 *Burns: Select Poems*, pp. 54-65), また *Lucrece* は *The Cotter's Saturday Night* (同上 pp. 66-72) に當る Pooler はその *Venus and Adonis, &c.* の Introduction (p. xlv) に述べてゐる。この註者は更にまた語を重ねて、“The poems have been too lightly regarded as companion pictures, almost comparable to *L'Allegro* and *Il Penseroso* (K. E. C. 本 *Longer English Poems*, pp. 8-18), where a grave cheerfulness stands in harmonious contrast to a gentle melancholy. Each has, no doubt, its own setting and accompaniments, day or night, skylark or screech-owl, but between them there is the gulf that separates comedy and tragedy. They are not merely or mainly twin studies of unlicensed passion in opposite sexes. Venus is no unfaithful wife answerable to an outraged society and a betrayed husband, but a heathen goddess exercising, as Shakespeare is careful to remind us, the rights of her office with her own jurisdiction, and neither recognising nor responsible to human laws. Adonis runs no danger that we cannot contemplate with equanimity. He is secure in his indifference, and his sufferings are those of a child's kitten teased and petted when it would be happier in the amusements of its kind. Even if the wiles of Venus had

succeeded, there would be something almost ludicrous in lamenting his fate in words which when used of Lucrece are natural and affecting :

No man inveigh against the winter'd flower,

But chide rough winter that the flower hath kill'd."

さ説き Shakespeare の *Lucrece* には、如何にも突きつめた遣る瀬のない悶へさ赦す道のない非道の行さが描かれてゐて *V. & A.* のやうな淡い透明な気分さは對照の不可能な別の趣が強く内在してゐる旨を縷陳してゐる。但し上記の引用文の末尾の二行は *Lucrece* (p. 92, ll. 1254-5) から取つたもの。

The Rape of Lucrece には *V. & A.* と同じく Southampton 家第三代の當主 Henry Wriothesly 伯爵に對する奉獻の辭が卷頭に掲げてある。前の年の約を履んで「一層重い物」を御覽に供したのであらう。併し、謙遜な態度は茲にも "my untutored lines" と云ふ詞に十分示されてゐる。

その奉獻の辭の次に掲げてある「梗概」も多分は Shakespeare 自身の筆に成つたものであらう、と思はれるのはそれが 1594 年の初版から添へられてゐることで、若しさうなら、それは "is a curiosity, this and the two dedications to the Earl of Southampton being the only prose compositions of our great poet (not in a dramatic form) now remaining." と Malone は言つてゐるが、如何にもさうである。

III. "SONNETS"

Sonnets の難物であることは、その門の戸にも比すべき T. T. の「卷頭の詞」の難解であることから始まる。その中に出て来る "THE ONLIE BEGETTER OF THESE INSUING SONNETS" の "MR. W.H." にうかさ手を出すことは熊蜂の巢を弄ぶよりもつゝ危険で、その爲に手足を整されるはまたしも、眼顔に饅頭大

の腫物を拵へて青息といきの學者が歐米にごろごろ呻(ふ)いてゐる。“W. H.”に關する諸説の中 Southampton 伯であるを云ふ想像は非常に人氣を呼んでゐるが、之に伯仲してゐる有力な見解はそれを William Herbert, Earl of Pembroke と見る説である。

Concise Dict. of Nation. Biog. に據るこの人は “third Earl of Pembroke of the second creation (1580-1630), eldest son of Henry Herbert, second earl of the second creation; educated by Samuel Daniel, of New College, Oxford; succeeded as earl, 1601; disgraced for an intrigue with Mary Fitton; patron of Ben Jonson, Philip Massinger, Inigo Jones, and William Browne (1591-1643?); thrice entertained James I at Wilton; lord-warden of the Stannaries, 1604; member of the council of New England, 1620; interested in the Virginia, Northwest Passage, Bermuda, and East India Companies; Lord Chamberlain, 1615;.....chancellor of Oxford University from 1617, Pembroke College being named after him; presented Barocci library to Bodleian; wrote poems which were issued with those of Sir Benjamin Rudyerd, 1660. To him as lord chamberlain and to his brother Philip the first folio of Shakespeare's works was dedicated in 1623, but there is no good ground for identifying him with the subject of Shakespeare's sonnets, or with the ‘Mr. W.H.’ noted in the publisher Thorpe's dedication of that volume (1609).”

但し、この末段に “Mr. W.H.” と Pembroke 伯爵との關係を殆ど否定せんとしてゐるのは、この人名辭典の編輯主宰の Sir Sidney Lee 自身が “W.H.” = “William Hall” 説の固い保持者であつて例の難解の語 “BEGETTER” を “procurer” の意に解するが爲にはかならぬ。その事を Richard Garnett は *English Literature* (Vol. II. p. 214) で評して、“‘Begetter’ may be used in this sense, but that this is not the signification here is shown by the circumstance that the

‘begetter’ has the poet’s, not the publisher’s, promise of immortality, no fiction of Thorpe’s, but made repeatedly in the *Sonnets* themselves.”

と述べ、“begetter”を著者で無いとする以上、その著作の動機となるべき主人公を考へるが當然で、その主人公たるべき“Mr. W. H.”には *Sonnets* その者の内容から見て五つの附随条件が必要となると言つてゐる。その五箇條とは、(1) また若年の人であること、(2) Shakespeare より身分の遙に高い人物であること、(3) 詩人たちの保護者であつて且つ自らも文藝の道に長じた人であること、(4) 眉目の秀麗な人であること、(5) その人の友人は大にその結婚を望んでゐること、以上五つである。

處で *Sonnets* の内的證左に據れば、全體の歌の類一百五十四首の中確かに婦人を當の主人公として作つたと思はれる二十六首 (i.e. CXXVII-CLII) 及び單に「情火」と云ふ事柄を人物を離れて impersonal に歌つた二首 (CLIII-CLIV)、都合二十八首を除いた殘餘の一百二十六首は、上述の五つの條件を具した或る一人の貴公子に宛てられたものとなること、當の“Mr. W. H.”は果して誰であらうと云ふ具體的の問題が生ずるわけで、これが長い歳月に互つて甲論乙駁の論争の種となつてゐるのである。

その論争の中々埒の明かないのに半はあきれ氣味で、それを初めから今日に至るまで歴史的に調べることに依つて一道の光を新に求めて見たのが、*The Shakespeare Canon* を數編に互つて現に論述して來た Shakespeare の諸問題の研究者 J. M. Robertson が一昨年の十月に公にした *The Problems of the Shakespeare Sonnets* の一冊である。その約三百頁の中には第一部「文獻篇」に於て、この問題の發端から十九世紀及び二十世紀に於ける諸註釋家の所説を一一に叙述考證し第二部「考察篇」に於てその上に顯れ來る諸問題を論究考證してゐる。そしてその結論は (1) the Thorpe Quarto is a miscellany, probably an album belonging to William Hervey; (2)

only some two-thirds of the Sonnets are by Shakespeare; (3) while a number were certainly addressed to the Earl of Southampton, not all of the genuine Sonnets in the first series were not so addressed. 云ふ三要目に歸着するのである。斯うなるを今日までのこの方面の攻究に大部無駄な勞力が費されてゐたことになり、將來の研鑽の方針にも多大の變更を見ねばならぬこととなるのである。

尤も今日まで雖も *Sonnets* のあるものに對して異分子の混入に想到した評者や註者もないでは無かつた。また全部一百五十四首の配列の順位を、新規の分類を試みることに依つて、新たに立てゝ見ようとした人もある。Mrs. C.C. Stopes がその *Shakespeare's Sonnets* の卷末に掲げてゐる “Suggested Re-Arrangement” もその一例である。この方面の一つの資料としては、Sir Israel Gollancz の *Shakespeare's Sonnets* (“The Temple Shakespeare” 版) の卷頭に添へてゐる『「ソネツ」の解剖』が大に役に立つ。次に掲げるのが即ちそれである。

ANALYSIS OF “THE SONNETS”

A.—“THE BETTER ANGEL”: I—CXXVI. (善玉)

I. LOVE'S ADORATION: I—XXVI (愛の渴仰)

Beauty and Goodness must live on $\left\{ \begin{array}{l} 1. \text{ in the beloved's children (I—XVI)} \\ 2. \text{ in the poet's verse (XVII—XXV)} \end{array} \right.$
Envoy (XXVI)

Interval.

II. LOVE'S TRIALS: XXVII—XCIX (愛の試練)

(XXVII—XXXII)
 (a.) **The bitterness of absence** $\left\{ \begin{array}{l} 1. \text{ The sense of loss (XXVII, XXVIII)} \\ 2. \text{ Night-Thoughts } \left\{ \begin{array}{l} \text{The poet's outcast state (XXIX)} \\ \text{Bereavement (XXX)} \end{array} \right. \\ 3. \text{ Love dispels the gloom (XXIX—XXXI)} \end{array} \right.$
Envoy (XXXII)